

2007年 6月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2007年6月
第 62号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（1）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（58）（山内 薫）	3
酔夢亭読書日記（第21回）（酔夢亭）	6
見果てぬ夢を（5）（山本優子）	8
漢点字訳書のご紹介 『論 語』	12
「東京漢点字羽化の会」第17、18回例会報告並びに 第1、2回「学習会報告」とわたくしごと（木村多恵子）	17
漢文のページ	23
漢点字講習用テキスト（初級編・第3回）	30
ご報告とご案内	31

漢点字の散歩 (一)

岡田 健嗣



力となる辞書です。こういう辞書が欲しい!と思つてはみたものの、もし手の届くところに漢点字版の「漢字源」が出現したとして、本当に私に使いこなせるのだからうか?こんな不安が脳裏を過ぎらなかつたと言えは嘘になります。

一 辞書を引く

言うまでもなく視覚障害者の文字である(点字)に

漢点字で表された「漢字源」
本会のスタートと時期を同じくして、横浜国立大学教育人間科学部教授・村田忠禧先生は、一九九六年春、「漢字源」(藤堂明保編、学習研究社)の漢点字版を完成されました。そのニュースを耳にしたとき私は、このような資料が、誰もが利用できる図書館に所蔵されればよいかと、極めて軽く、極めて当然と思つたのでした。村田先生にはそれより以前からお世話になっておりましたので、早速お電話をさせていただきました。今から思えば何と乱暴な振る舞いに及んだものかと、苦笑されま

す。
は、川上泰一先生が(漢点字)を発表されるまで、(漢字)の体系はありませんでした。教育界では、「点字はカナで充分、漢字を点字で表すなど無理の極み」と考えられていました。点字で出版されている辞書類にも(漢字)が用いられることはありませんでしたし、何かの工夫で(漢字)を説明しようとしたものもありませんでした。学生にとって国語辞典と漢和辞典は座右に置くべき辞書ですが、前者はカナだけで表されておき、後者は全く存在しませんでした。

先生は私の希望に耳を傾けて下さり、このような辞書を受け入れて下さる公共の図書館があること、漢点字書の製作ができることという二つの条件が整うのなら、原本の出版元である(株)学習研究社様に、同書のパソコン用のデータを無償で提供していただけるようご相談下さるとおっしゃって下さいました。

「漢字源」といえば、学生にとつては欠かせない漢和辞典です。とりわけ漢文の読解の初心者にとつて大きな

私は当時、漢点字は習得できたものの、辞書を引いて言葉の意味や使われ方を調べるといふ経験がありませんでした。(漢点字)のお陰で「漢点字仮名交り」の文章に多少接する機会も増えていきましたが、文字や言葉を自ら調べるなど、思いも寄りませんでした。村田先生のお仕事のニュースを聞いて、漢点字で表された辞書のような資料があつても不思議ではないと、誠にコロンブスの卵の如くに、初めて気付かされたのでした。村田先生の暖かいお言葉に何とかお応えしなけ

ればならない、これが横浜漢点字羽化の会の出発点になったと言っても言い過ぎではなかったのです。

漢点字版の「漢字源」を図書館に所蔵していただく、これは最も大きな課題でした。

この課題も、横浜市中央図書館と、横浜市議会議員の大滝正雄先生のご理解とご尽力で、視覚障害者の文字文化に一步を印していただくことを目的に、受け入れ態勢を整えていただけることになり、図書館と本会との間に、翌一九九七年春に納本するというお約束を取り交わしました。

大部の漢点字書を、一年未満という短期間に完成できるかという、始まったばかりの本会としては、極めてドラステイックな態勢作りが求められました。これも木下和久さんを中心に、参集間もない会員が、点字プリンターでの打ち出しから製本に至るスキルを、全く初歩から作り上げるといふ、このような機会でもなければ経験できない、未曾有の作業に挑戦して下さいました。これは本会にとって、無形の財産として現在も生きています。

〈漢点字〉のテキスト作り

二〇〇三年度から本会では、横浜市健康福祉局のご後援をいただいて、〈漢点字〉の学習会を始めることになりました。

〈漢点字〉の学習は、それまでは日本漢点字協会の発行している、川上泰一先生がご執筆になったテキストを

使用していましたが、手に入り難くなって来ていたことと、一緒に学んで行くにはオリジナルの発想も求められるであろうことから、私自ら筆を執る覚悟を決めて、失敗や間違ひも私に起因することとして、オリジナルのテキスト作りに着手することにしたのでした。

当然と言えば当然ですが、〈漢字〉という文字が、これほどまでに難敵であったか、川上先生のご苦勞・ご苦心に、今更ながら頭の下がる思いです。

川上先生のお考えは〈漢字〉を、基本的な文字と、それらを構成要素として組み合わせられた複合的な文字と捉えて、それぞれの文字の形と意味と読みの関連を〈漢点字〉に生かそうというもので、〈漢字〉に関しての豊富な知識の裏付けなしには成し遂げられないものだということを悟らされるには、さほどの時日を要しませんでした。

しかし私が〈漢点字〉のテキストに挑戦しようと無謀にも決意したのも、点字の世界に〈漢字〉に関する辞書が出現したことによつていました。〈漢点字〉を使用することで、形・音・義を備えた〈漢字〉を、そのままそっくり、晴眼者の皆さんが行つていられるようにとまでは行かないにしても、独力で調べることができていることを確信できたからに他なりません。

このテキストの構成は、①基本文字と複合文字の區別、②見出し語とその漢点字符号、③基本文字であれば

その形の説明、複合文字であれば構成要素である基本文字との、形と読みと意味の関連、⑤音読訓練と文字の意味との関連、⑥用例とその意味と用い方、⑦漢点字符号の由来とその解釈としましたが、どれを取っても一朝一夕には参りません。

現在本会では「漢字源」に加えて、白川静先生が編集された「常用字解」と「人名字解」（平凡社）の漢点字訳に着手しております。これらが完成すれば、複数の辞書を引くという、一般では当然とされていることが、視覚障害者に初めて解放されることとなります。このような比較的小規模な辞書を独力で引いた上で、図書館等のご協力を得て更に詳細を調べるといふ、極めてノーマルな環境が実現することになります。

繰り返しになりますが、「漢点字」で表された辞書で「漢字」を調べるといふ、思えばつい先日までは夢のまた夢であったことが、現在では当然とされている現実、不思議と言えばこれほど不思議なことはない、実にこのようにして、テキストを作っているのです。

まだまだ「漢点字」への関心は十分とは言えません。しかし以上申し上げたことが現実になっているということをご存じになれば、何れ多くの視覚障害者に、「漢点字」は社会参加に欠かせない文字であるということが浸透して行くことを、私は確信しています。

(続く)

点字から識字までの距離(五八)

みどり学級へのサーブス(七)

みどり学級での公開授業(三)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

今回の公開授業指導案には、学校全体の研究主題として「ふれよう 考えよう 伝えよう」読書活動を通して「」が掲げられており、みどり学級では、生活単元「お話しを楽しもう『三びきのやぎのがらがらどん』」が活動名で、活動の目標は「緑図書館の方々とふれあいを通して、お話しを楽しむとともに、いろいろな本があることを知る。」と「読書活動に参加し、本の世界を楽しむことができる。」の二つ、取り組みの経過は五時間で構成され、一時間目は国語関連で「『三びきのやぎのがらがらどん』(活動の導入)読み語り・歌の練習、二時間目と三時間目は図工関連で「やぎのお面を作ろう!やぎのお面作り、背景作り」、同じく三時間目は音楽関連で「本に出てくる音(擬音語)をさがそう!本の中に出てくる音と似ている音のする楽器をさがし、活動を楽しむ」、四時間目は生活単元関連で「緑図書館の方々との劇遊び」三びきのやぎのがらがらどん」本番の五時間目が「ブ



写真1 がらがらどんの絵本を読む

その後で私が作曲した「三びきのやぎのがらがらどんの歌」を私のピアノに合わせて歌った。この歌は図書館で人形劇を行った際に作詞作曲したもの、単純でたいした曲ではないのだが、自分の作っ

ックトーク（テーマ「かいじゅう」）～緑図書館の方々の劇遊び「三びきのやぎのがらがらどん」となっていた。二月一四日の公開授業の日に向けて、二月九日がちょうど第二木曜日のみどり学級の訪問日に当たるので、この日を四時間目の劇遊びの『三びきのやぎのがらがらどん』の予行練習に当てた。この日は我々緑図書館の職員三人がいつも通り一冊ずつ絵本の読み語りを行ったあと劇の練習を行った。役割分担は、やぎを六人の子どもたちが、トロールを担任のT先生が演じ、緑図書館職員の担当は音楽ということになっていた。この日はまず、私が子どもたちに『三びきの



写真2 歌の練習

くさをたべにいこう
みんなでいこう がらがらどん
ふとりにいこう がらがらどん
さんびきの がらがらどん
というもので、最終フレーズ「さんびきの がらがらどん」の前には四分休符があり、一テンポ置いてから「さんびき」と入るように作曲したのだが、子どもたちが歌いにくいとのことで、黒板の前の模造紙に大きく書かれた歌詞は「さんびきやぎの がらがらどん」と休符なしの歌詞に変更されていた。

た曲を子どもたちが、大きな声で歌ってくれるのを聞いて少々感激した。歌詞は
ちいさいやぎの が
らがらどん
ちゅうくらいやぎの
がらがらどん
がおきいやぎの が
らがらどん
トロールのはしをわたり



写真3 積み木の橋を渡る

学年と低学年の男女ペアで二人ずつ組み、それぞれ三匹のやぎになり、大きな積み木でつくった橋を渡っていく。橋の先に大きなパネルが二つ並べられ、そのパネルの間にT先生のトロールがいて問答をする。原作では、もつと大きいやぎが次にやってくると言って、小さ

いやぎも中くらいのやぎも橋を渡ってしまふのだが、この劇では、小さいやぎも中くらいのやぎも橋を渡れずに戻ってきてしまい、大きいやぎが渡るときに三匹が力を合わせてトロールをやっつけるという筋に変えてあつた。トロールをやっつ



写真4 橋を渡れずに戻ってくる

つていて、いつもの倍の十時近くまで練習が行われた。この『課外授業ようこそ先輩』は二〇〇六年四月八日に「私たちの町で戦争があつた」というタイトルで放映された。高木さんは二月一四日の公開授業当日にも、開校九五周年を記念して『ガラスのうさぎと私』という講演を公開授業と研究発表の後の午後三時から行った。



写真5 トロールを粉碎する

けた後にもう一度みんなで「三びきのやぎのものがらどん」の歌を唄って幕となった。

この日は丁度、先の高木敏子さんが学校を訪れ、NHKの番組『課外授業ようこそ先輩』の収録が行われていた。そのため授業の開始と終了のベルは鳴らないことにな



写真6 おしまいの歌の練習

酔夢亭讀書日記(第21回)

酔夢亭



某月某日。

齋藤美奈子「趣味は読書。」を読む。ベストセラーの本を新刊本で買って読むのはなんとなく抵抗がある。「売れている」ってだけでなんとなく付和雷同して読むのは、忙しい知性人としては取るべき読書の態度ではない、などとつぶやく。それにブックオフなどで待っていれば、多少流行遅れにはなるけれど、105円で流れてくるわけだしね。しかし触りだけでも知っておきたい、話のたねにしたい、そんな無精な人の代わりに齋藤さんがベストセラーを読んでくれた。名付けて「読書代行業」。

読んでくれた本は、たとえば、「大河の一滴」(五木寛之)、「頭がいい人、悪い人の話し方」(樋口裕一)、「鉄道員(ぼっばや)」(浅田次郎)、「プラトニック・セックス」(飯島愛)、等々の50冊ほど。意外だったのは、江藤淳の「妻と私」がベストセラーになっているということ。死ぬことによっても「作家は行動する」。

読んでもらったけれど、本はやっぱり自分で読まなくてはつまらない、という向きはやっぱり自分で読むに越したことはない。

続けて齋藤さんの「モダンガール論」。女の子には出世の道が二つあるわけで、ひとつは男の子と同じように立派な職業人になること、もうひとつはこれは男の子とは違って立派な家庭人になることであった。女の子は日本の近代化の100年、この二つの出世観の間で揺れ動いてきた、という。「進歩史観や抑圧史観は、歴史を正義の味方の目でみる視点」だから、そんな視点は廃して、「リッチな暮らしがしたい、きれいな洋服が着たいという目先の願望から、社会の中で正當に評価されたい、人生の成功者と呼ばれたいという大きな望みまで、人々の欲望が渦巻くところに歴史はできる」という「欲望史観」から女の子の近代史を再構成してみようというわけである。

平成、昭和のコギャル(女子高生)やギャル(女子大生)が世の大人にバッシングされたように、明治の女学生も同じような目に遭っていたらしい。いわく、「女学生は亡国的だ!」、「女学生のファッションはなんだ」、「言語は花柳界の賤しき輩の用うる言語、又流行の履物とか衣服の色とかいうに至りても、価さ

え高ければよきものと心得、不釣り合のものをを用いたりしてなんたることか、と説教されるわけだ。

そういう意味では女の子は男の子より打たれ強いのかもかもしれない。打たれもしない、悩みもなかった男の子は、何より思考停止的すぎたのであろう、やけに元気がないものね。男の子のなれの果ての中高年のだらしなさ加減には我ながらいやになる。

某月某日。

福沢諭吉はアナーキストであった、と浅羽通明「アナーキズム」に紹介されている。福沢は、理想の政治体制について問われて「それは無政府だ、政府や法律のあるのは悪いことだ」、と無政府主義を説いた、という。幕藩体制の崩壊と維新政府の樹立を目の当たりに見ている福沢にとって政府に対する幻想など余り無かったに違いない。

アナーキズムというのは、「現実という体制」を疑うための強力な武器になる。たとえば、人は国家というものに属している、ということに何の疑いをも持たない時代、これは長い歴史の中でたまたま遭遇している幸福な時期というべきではないだろうか。

しかし、ある時相手のアラがなにかの拍子にみえて

しまった。そのアラはどんどん大きくなって、もはや我慢できなくなつたとしよう。男と女であれば、多少のこじれはあつても別れば良いだろう。住んでいる地域がイヤになればどこかへ引っ越してしまえば良いかもしれない。しかし、国自体がイヤになってしまったらどうするか。

かつては、マルクス主義に基づく革命幻想があつたからまだそうしたイヤになつた人間にも救いの道があつたが、共産主義は資本主義に完全に負けてしまつた。かといつて勝利を得た資本主義が、最大多数の最大幸福を実現しているとはとても思えないのも確かである。それは現実ここに生きている私達が充分承知のはずだ。

一家でボートに乗り込み、海の外に逃げ出すほどの絶望はないけれど、さりとて希望に満ちた国であるようにも思えない。

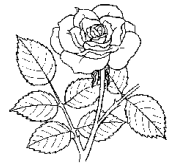
アナーキズム的な視点、たとえば、アナルコキャピタリズム、などから現実を捉えなおして考えたりするのも時には思考の訓練になるかもしれない。

以下次号



見果てぬ夢を（五）

山本優子



六 修行（承前）

孝之進は久留米での仕事を切り上げ、故郷に戻った。

健康そのもので頭脳明晰な孝之進の目が見えなくなつたといううわさはすぐ広がつた。

「前世で何（なん）かあつたとか」

「尚一（しよいつ）が西郷（せご）さまを裏切つたが、息子いたたつちよい（たたつている）」

などと、言う人たちがいた。

母千代は、毅然としていた。

「コウどん、おまや、難（むつか）し道（み）つ切（き）い開いて行（い）つがな。見えでん出来（でき）い仕事（しごと）があい。いっしよい気張（き）ろ（お前は、難（むつか）し道（み）を切り開いていける。見えなくてもできる仕事がある。いっしよにがんばろう）」

孝之進は、母の気持ちの切り替えが早いことに驚いた。自分自身はまだ、どこかによい治療法があり、治るのではないかと思つていたからだ。夢の中に桜島の雄姿や春の菜の花畑の鮮やかな黄色が出てきて「見え

た！」と叫ぶこともあつた。そんな孝之進の想いに周囲は気づかないらしく、親切にも見えない人間が生きていくための方法を調べてきては孝之進に教えようとした。

特に森山叔父は、方々に聞きまわり、鍼や按摩という盲人に適した仕事を身につけるしかない、と確信し、「鍼按摩」を学べと熱心に孝之進に説いた。孝之進も焼酎を販売する仕事はこの先無理だと覚悟するようになつてきていたし、母に心配をかけないためにも働く道を早く探さなくてはと考え始めていた。孝之進はその勧めを受け入れることにした。

生まれた時からの孝之進を知っている人たちに囲まれて鍼灸按摩の修行をするのは辛いに違いないと森山は考え、別の地域でよい鍼医がいまいかと探した。すると、知り合いが、久留米に住む、腕がよく面倒見もいと評判の高田という鍼医を紹介してくれた。近くに孝之進の眼疾の状態を見てくれた医者もいる。孝之進は、久留米で鍼按摩の修行をする決心をした。

高田から準備するようにと送られてきた「年期証文」というものを母に読んでもらい、必要事項を自分で筆を持つて書いていった。書いたものを自分で確かめられないので、人に読めるように書いているか、い

ちいち母に確かめてもらいながらの作業にも慣れてきていた。もう、一人では読み書きができない、社会と交渉するのに誰かの目を借りなくてはならない悔しさや心痛を押し殺しながら書く。鍼按師に弟子入りすること、見えないうちによい生き方ができるようになる、と考えることにした。年期期間は一応三年となっていた。その期間内に師匠に損害をかけた場合などについての賠償規定がこと細かに書かれていたが、師匠側の義務や責任については何も無い。ずいぶん一方的な証書だと孝之進は思ったが、これから生きていく世界ではひとまず理不尽なことも受け入れなくてはならないのだと考えた。

一八九六年（明治二十九年）の暮れ、いよいよ久留米に移った。手を引いてきてくれた母千代は故郷に戻り、孝之進は高田の家に住み込むことになる。その高田の家を初めて訪れた。全盲と聞かされていた高田夫妻が、見えていないということを相手に全く感じさせない雰囲気なのに孝之進は内心驚いた。高田は、気さくに話しながら、孝之進の肩を揉ませてくれと言つて、揉み始めた。肩こりの治療をしてもらったことなど無かった孝之進だ。

「俺いが体格調ぶいつもいじやろ（おれの体格を調べるつもりなのだろう）」

と、緊張していた。が、肩を揉んでもらうのは気持ちよかった。高田から入門してからの話や治療の話などを聴いているうちに気持ちもほぐれてきて、だんだんこれからの生活が楽しみになってきた。高田の方も礼儀正しく身体も頑強そうな孝之進のことをいっぺんに気に入ったようだった。

翌日から孝之進は、高田の住み込み弟子となった。その家の生活はだいたいこんなふうだった。朝は、十時から十一時ごろにそれぞれ起きる。十二時前後に朝食を摂る。それから兄弟子あるいは高田からの講義を聴く。正座して、語られることを集中して聴き、頭に叩き込むのである。解剖学のことなど、初めて耳にする専門用語、医学用語はわかりにくかった。教科書など無いので、聴いたことを、即、まる覚えしていくしかない。話す方も聴く方もこういう勉強方法が当たり前と思っっているようだった。孝之進は、がむしゃらに覚えなければならぬことを覚えた。講義のあと、兄弟子たちは「昼吹き」といって、「流し」に出る。笛を吹きながら歩き、按摩を頼んでくれる客を探すのである。入門したばかりの孝之進も兄弟子の風呂敷包みを抱えてついていかなくてはならない。雪の舞う手先が凍るような日であるとうと、寒風に吹き飛ばされそう

な日であろうと、呼んでくれる人に出会うまでは、四時間ほど歩き続けるほかない。幸い客を見つけると、兄弟子が治療をする横に座って技術を覚えてゆくのである。

帰って昼食（夕食）を摂り、午後六時ごろからはまた夜の「流し」に入る。決められた夜中の十二時まで歩き回っても、全く声のかからない夜もあった。重たい足を引きずるようにして帰宅する。「あぶれ按摩の笛哀れ……」などと、弟子たちは浪曲の文句をつぶやいていた。十二時すぎからそれぞれ夜食のぬるい茶漬けをかきこみ、冷たいせんべい布団に潜り込む。孝之進は自分が士族の出身であり、東京で書生生活を送ったこと、日清戦争で活躍したことなど一切口にださず、身を低くして仕えた。

そんな孝之進に高田は特別に目をかけて、教えた。そのおかげもあって孝之進は短期間で知識を習得しただけでなく技術の上達も早く、仲間たちから嫉妬されるほどだった。孝之進は、陰湿な陰口やいやがらせを気にかけないことにした。心許して語りあえる者がいない中、今後の進むべき道について一人想いめぐらす毎日だった。

二年あまりの年月が過ぎたころには、孝之進の知識

と技術は弟子たちの中で誰にもひけをとらないものになっていった。このまま鍼按医となり、故郷で開業すれば生活は安定し、母をほっとさせてやれるだろうと、孝之進にはわかっていった。が、胸にもやもやするものを払いのけられない。それは、生活を共にしている盲人仲間たちを知るうちに積もり積もっていった哀しみのせいだった。彼らの多くは、経済的に困窮している家庭から来ていた。学問の機会が与えられなかったばかりに見識が狭く、卑屈になっている者が多い。夜ごとに笛を吹いて歩き回り、客の肩を揉ませてもらいながら、ほかの客の悪口や孝之進が聞くに堪えない話題を繰り返す。毎日虚しい話を耳に入れられることに耐えながら、このような人たちも幼いうちから世で生きていくために必要なことを教えられ、学問の機会が与えられていたら、人生は違っていただろうと孝之進は痛切に思った。悶々と考えを巡らしているうちに、年々期間が終わる三年目が近づいてきた。孝之進のうちには盲人教育への想いが抑えがたいほどに膨らんでいった。ついにある日、孝之進は、高田の前に姿勢を正して言った。

「先生は、わたしが良い鍼医になることを期待して手取り足取り教えてきてくださいました。鍼灸按摩の

仕事は誇るべき立派な仕事であることを、確信しました。が、わたしは盲人も学問を身につけ、見える者と対等に生きていける時代を切り拓くべきとも考えるようになりました。そのような幻を実現できる場所を探したく思います」

高田は、驚きを隠さなかった。

「盲人がそんな大それた夢を言うたところで誰も相手にせんばい。ここに残りなさい。一緒に仕事をしていこう。先々は跡取りにとさえ考えてきたのだ」

高田は説得しようとした。だが、孝之進の決心が固いのを知ると、とうとう言った。

「よろしい。お前のような器の者は、わしみたいにくこの場所で小さく無難に一生を過ごすわけにいかんだらう。お前にだからできる仕事を見つけていきなさい」

孝之進は、師匠に対して感謝と詫びを繰り返した。荷物をまとめ、そのもとを去った。

七 増江

一八九九年（明治三十二年）二十九歳になった孝之進は、盲教育を始めるのにふさわしい地を求め、母に手をひかれての旅に出た。孝之進が流し按摩をして母と二人何とか食いつなぎながらの旅だった。九州のあ

ちこちをさまよっているうちに、一月、二月と過ぎ、思った以上に旅は長くなってきた。寒さが厳しくなってきたころ久留米にまたやってきた孝之進と千代を、今村虹助一家が泊めてくれた。肩身のせまい思いだったが、母をなるべく暖かい所で休ませたかったので孝之進は虹助たちの厚意を感謝して受け入れた。

夜、虹助は、孝之進に身体を揉ませながら、今後何をしたいのかといったことを尋ねてきた。虹助は、度量の大きさを感じさせ、一緒にいる者が何でも話してしまいたくなるような雰囲気を持っていた。孝之進は正直に盲人教育に取り組みたいという夢を語った。ふすまを隔てた隣の部屋で、増江が耳をそばだてて孝之進が語ることに聴き入っていたと知ったのは、後になってからだだった。

虹助夫妻への按摩が済み、母といっしょに廊下を歩いていくと、増江が向こうから声をかけてきた。

「コウさん、見えなくなつて本が読めんでも、字は書けるでしょう。書き続けなさんの。でないと、書けなくなつてしまいますよ。はい、これ使ってください」

増江はずっしりと重たい風呂敷包みを孝之進に押しつけて行ってしまった。

漢点字訳書の紹介

今年度は、「論語」を漢点字訳して、横浜市中央図書館に納入致しました。以下にご紹介致します。

(奥付より)

論語

1963年7月16日 第1刷発行

1996年4月5日 第55刷発行

訳注者 金谷 治(かなやおさむ)

発行者 安江良介

発行所 株式会社岩波書店

(編者はしがきより)

はしがき

『論語』は孔子を中心とする言行録である。それは、『大学』『中庸』『孟子』とならぶ「四書」の筆頭として、中国はもとより、われわれの祖先の血肉となりバックボーンをも形成した、古典のなかの古典である。『論語』という名まえは、孔子の名とともに、世界的に余りにも有名である。だがしかし、それだけに、その名を聞いたとき、過去の東洋社会をささえてきた儒教の経典として、すぐさま古くさい道徳主義を連想する人も少なくないであろう。嫌悪の情をともしながら、冷い非人間的な聖人孔子の姿を思い浮かべ

る人もあるであろう。しかし、それらの人のおおむねは、いわゆる食わず嫌いである。この訳書は、まず何よりもそうした人々によって読まれることを期待する。

確かに古いのである。二千年以上も前のものといえ、古くさいのはむしろ当然かも知れない。しかしそれでは、なぜそんなにも古いものが、現代までの長い間を多くの人々に愛読されてきたのであろうか。その理由を、単に過去の政治や社会のあり方だけでかたづけしてしまうのは、余りにも単純である。『論語』の内容そのものに、いつまでも人々の共感をよび、新しい歴史の進展をうながすような、そうした不滅の古典としての価値があるからにほかならない。

二十篇の内容は、ほとんどが断片的といってもよいような短いことばの集まりである。そして、その配列の順序にも格別の意味のないのが一般である。とかたが政とかいふ篇名でさえも、篇の内容のまとまった意味を示すものではなくて、ただ篇の初めの二字をとったにすぎない。こんな例は、恐らく他のどの国の古典にも見出しがたいものであろう。要するにばらばらの内容である。だから、いそがしい読者は気ままな拾い読

みをすることも許される。自分の体験に照して玩味していけば、それだけでもはっとして興奮を覚えるような何章かに出くわすはずである。しかし、もしいくらかの暇を得て落ちついた通読をしていくなら、不思議なこと、そのとりとめないばらばらな中から、孔子の人間像が次第に鮮明に浮き上ってくる。孔子をとりまく門人たちのありさまが生き生きと躍動してくる。そして、そこからもし出される一種の人間的魅力が、ついにはわれわれの心をしっかりと捉えてしまうのである。

ここで語られることは、もとより道徳が中心である。ただその道徳は、「人としての生き方」といいたおした方がより適切であるように、極めて現実的人間的である。恐らく、これほどまで日常的な生活や身近い政治の問題について配慮のゆきとどいた古典は、全く珍らしいであろう。窮屈な道徳主義を予想した読者は、この書物の楽天的な明るさにうたれ、とりわけて宗教的神秘的な性格の少ないことに驚くであろう。「老人には安心され、友だちには信ぜられ、若ものにはしたわりたい。」という、日常生活での平安が孔子の望みであった。非人間的な聖人孔子を予想した読者は、この書物の中で、じょうだんを言ったり、自分の

過失を指摘されて感謝したりしている孔子を見出して、とまどうであろう。孔子は親しみ深く、ものやわらかな態度で、われわれに語りかけてくるのである。それは、恐らくは簡古なすぐれた文章の力によるところも大きいであろう。そして、孔子が強調した仁の徳は、肉親の間での自然な愛情から発した、一種の調和的な情感をもとにしたものである。道徳の基礎は何よりもまず人間自身のうちにあった。『論語』は何にもまして人間的身の書物だといえるであろう。そして、そのたくましいまでの人間肯定の精神こそ、いつの世にも、またどこでも、いかに強調されてもしすぎることものない『論語』の真価であるとしてよからう。

『論語』の編纂については、はっきりしたことは分からない。孔子の没（BC四七九）後、その門人たちの間で次第に記録が蓄えられ整理されて種々のまとまりで伝えられ、やがてある時期に集大成されたもので、その時期は恐らく漢の初めごろ（BC二世紀）のことであろう。武内義雄博士の『論語之研究』、津田左右吉博士の『論語と孔子の思想』の両書は、この問題を追求して精密を極めている。（ちなみに、両書は近年での論語研究の白眉である。）

さて、編纂された『論語』には、長い年月の間にお

びただしい数の注釈書が生まれた。その中の特に代表的なもの、魏の何晏の「集解」と南宋の朱熹の「集注」とである。前者は漢・魏の諸注解を集めて何晏自身の見解をも加えたもので古注とよばれ、後者は北宋学者の解釈を総合して一家の説を立てたもので新注とよばれる。そして、古注系統の詳解には宋の邢昺の「疏」、梁の皇侃の「義疏」、清の劉宝楠の「正義」、潘維城の「古注集箋」などがあり、新注を敷衍したものは宋の金履祥の「考証」、清の簡朝亮の「述疏」などがある。わが国のものでは、新注と古注とを取捨折衷して一家をなした伊藤仁斎、荻生徂徠、安井息軒、東条一堂のものなどがすぐれている。

この文庫本は、原文と読み下しと現代語訳とを合わせのせて、対照して読めるように配慮したもので、広い読者のために、これまででない最も便利な体裁と最もすぐれた内容とを備えることを主眼とした。そのために、原文では最も正確なテキストを提供すること、読み下しでは江戸時代から一般に行なわれてきた典型的な読み方を伝えること、現代語訳では諸説を参照して正確なものとの意味に迫るとともに、分かりやすい本当の意味での翻訳として成功することに力を注いだ。

まず原文であるが、武内博士の研究によると、『論

語』の異本には大別して二つの系統がある。一つは唐の開成石経に由来するもので、中国の版本は多くこれに属し、いま一つはわが奈良・平安のころ遣唐使によってもたらされた古本の流れを汲むもので、日本の古写本はみなこの系統である。そして、この二系統は、さらにさかのぼると隋・唐間の陸徳明が『經典釈文』で本文に採用したテキストが前者に近く、その注記に採用した異本が後者に似るという結果になっている。博士はわが清原家の証本を底本とし、それを開成石経と対校することによって、岩波文庫の旧版『論語』の原文を定められた。この新版の原文もまた、博士の諒解のもとに、原則としてそれを採用することにした。テキストの重要な異同を明らかにした最も正確な原文といえるであろう。

次に読み下しであるが、江戸時代に最もひろく行なわれて明治以後まで影響を及ぼした訓点は、その中期から出た後藤芝山の後藤点と初期の林羅山の道春点とである。後藤点では、分かりやすい日本語としての読み方をしようと苦心したあとがうかがえて興味深い。全体に読みすぎた感じが強く、古い読み方の名ごりをとどめている道春点と比べて、一長一短である。このほかでは初期のもので文之点、闇齋点、末期で一

齋点なども有名であるが、要するにこれらは朱子の新注にもとづいた訓点である。新注が入ってくるまでには、古注にもとづいた王朝以来の博士家の伝統的な読み方があった。嘉永元年に清原家の証本を模刻した北野学堂本は、「本文ニヲコト点アルヲ仮名ニ移シテイササカモ私意ヲ容レテ改メザル者也。」というように、よくその面目を伝えており、慶応の日尾点以後の訓点に大きく影響を与えたとみられる。ここでは後藤点と道春点とを主としながら諸点を参照し、重要な異読は注として保存するようにした。

さて、最後に現代語訳であるが、新注の解釈に従った倉石武四郎博士のものがこれまでの中で翻訳といえるほとんど唯一のものである。原文と読み下しとをのせて、それに語釈や通釈を加えた類のものは極めて多いが、いずれも解説とか講釈といふべきもので、翻訳ではない。この問題は『論語』だけにとどまらないのであるが、中国の古典にはまだ安定した翻訳のスタイルというものができていないといつてよからう。『論語』のような原文の簡単なものでは、文章だけを追って訳してみても、もちろん十分には意味のとりにくい所が出てくる。いきおい解説めいてくるわけであるが、それでは原文の調子は全くくずれてしまう。だれ

にでも分かるような翻訳という目標からして、この点に困難があった。それに、分かりやすくするという点にも、現代的にはつきりさせ過ぎて却って原文の含蓄ある味わいを破るという恐れもあった。補ないを最小限にし、必要な説明を注にまわして、できるだけ原文のニュアンスをそこなわれないようにと腐心したが、訳文にはなお未熟なところもあるであろう。博雅の教正を期待したい。

中扉の孔子像（孔子像絵は省略）は明の万曆版「聖蹟図」（東北大学蔵）からとった。後に従うのは顔回である。孔子の肖像には善いものが少ないが、これなどは伝来の正しさを思わせるすぐれた風貌で、出色のものだと思う。ここに掲げて広く紹介できることは筆者の喜びである。

なお、恩師武内博士の旧版からは、原文のほかでも少なからぬ教導を受けた。また倉石博士の訳書と吉川幸次郎博士の訳解書とからは、特に現代語の訳文のために多くの示教を得た。ここに合わせしるして深甚の謝意をささげる。

昭和三十七年十月

東北大学中国哲学研究室にて

金谷 治

(本文より)

子の曰のたまわく、学びて時にこれを習う、亦た説よつこばしからずや。朋ともあり、遠方より来たる、亦た樂よろこしからずや。人知らずして慍うらみず、亦た君子くんしならずや。

先生がいわれた、「学んでは適當な時期におさらいする、いかにも心嬉しいことだね。「そのたびに理解が深まって向上していくのだから。」だれか友だちが遠い所からもたずねて来る、いかにも楽しいことだね。「同じ道について語りあえるから。」人が分かってくれなくとも気にかけない、いかにも君子くんしだね。「凡人にはできないことだから。」」

子の曰のたまわく、巧言令色、鮮すくなし仁。

先生がいわれた、「ことば上手の顔よしでは、ほとんど無いものだよ、仁の徳は。」

子の曰のたまわく、君子くんし、重からざれば則ち威いあらず。学べば則ち固こならず。忠信を主とし、己おのれに如しかざる者を友とすること無かれ。過あやまてば則ち改むるに憚はばること(な)かれ。

先生がいわれた、「君子くんしはおもおもしろくなければ威い厳げんがない。学問すれば頑固がんこでなくなる。「まごころの徳である」忠と信とを第一にして、自分より劣つたも

のを友だちにはするな。あやまちがあれば、ぐずぐずせずに改めよ。」

孔子の曰のたまわく、君子に侍じするに三愆さんぜんあり。言未げんだこれに及ばずして言う、これを躁そうと謂う。言これに及びて言わざる、これを隱いんと謂う。未だ顔色を見ずして言う、これを瞽こと謂う。

孔子がいわれた、「君子のおそばにいて、三種のあやまちがある。まだ言うべきでないのに言うのは、」がさつ」といい、言うべきなのに言わないのは隠すといひ、「君子の」顔つきも見ないで話すのを「めくら」という。」

孔子の曰のたまわく、善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては湯かきを探るが如くす。吾れ其の人を見る、吾れ其の語を聞く。隱居して以て其の志しを求め、義を行ないて以て其の道を達す。吾れ其の語を聞く、未だ其の人を見ず。

孔子がいわれた、「よいことを見ればとても追いつけないように「それに向かつて努力」し、よくないことを見れば熱湯に手を入れたように「急いで離脱」する。わたしはそういう人を見た。わたしはそうしたことばも聞いた。世間せけんからひきこもつてその志しをつらぬこうとし、正義を行なつてその道を通そうとする。」

わたしはそうしたことばは聞いた。だが、そういう人はまだ見たことがない。」

孔子の曰わく、益者えきしやや三友、損者三友。直きを友とし、諒まことを友とし、多聞を友とするは、益なり。便辟べんぺきを友とし、善柔を友とし、便佞べんないを友とするは、損なり。

孔子がいわれた、「有益な友だちが三種、有害な友だちが三種。正直な人を友だちにし、誠心の人を友だちにし、もの知りを友だちにするのは、有益だ。体裁ていさいぶつたのを友だちにし、うわべだけのへつらいものを友だちにし、口だけたつしやなのを友だちにするのは、害だ。」

孔子の曰わく、命いのちを知らざれば、以て君子たること無きなり。礼を知らざれば、以て立つこと無きなり。言を知らざれば、以て人を知ること無きなり。

孔子がいわれた、「天命が分からないようでは君子とはいえない。「心が落ちつかないで、利害に動かされる。」 礼が分からないようでは立っていけない。

「動作がでたらめになる。」 ことばが分からないようでは人を知ることができない。「うかうかとだまされる。」

「東京漢点字羽化の会」

第17、18回例会報告並びに

第1、2回「学習会報告」とわたくしごと

木村 多恵子



第17回例会、2007年4月11日（水、夜）

18…30…20…30

いよいよこの4月21日から「漢点字」を何とか、視覚障害者の方々に広めようと計画した、「視覚障害者のための〈漢点字〉学習会」の第一回が始まる。そのための、最終打ち合わせをした。

一番気になるのは、初めてお会いする人との待ち合わせがスムーズにゆくか、ということであるが、これは受講者が、かなり一人歩きに慣れていられるので、きつと心配しなくてよいと思う。とはいえ、会員のサポーターもそれなりに緊張しておられると思う。

次の準備事項は、レーザライターとボールペンを使って、漢字を書いていただくのだが、文字の大きさ、筆圧の入れ加減など、実際に書いていただいた。筆圧の加減さえ慣れてしまえば、これもまるで心配することはないと思う。

岡田さんが作って下さった「漢点字テキスト第一巻」の墨字版40冊を、会員がコピーして製本もして下さるようになった。

新しい漢点字が出現し、それを字式でどう言い表すか、そのノウハウを岡田さんから説明していただいた。

放送大学の入学願書の手続きにも会員のお一人が連れて行ってくださり、以後の面倒な書類、その他のことも、ひき続いて見てくださると言う。テキストも、ちやくちやくと入力が進み、校正も順次行われ、後は木村が頑張つて？楽しみながら学ぶことである。

会員の皆様に「ボランティア保険」に入会していた。 「東京漢点字羽化の会」の活動中のアクシデントについての保険である。とくに、視覚障害者との行動の中で、こちらが気をつけていても、何が起きるかわからないからである。その手続きも会員のお一人がしてくださった。

お部屋をお借りするための予約、その他、皆様が快く、積極的に手伝ってくださるので、ますますこの会が楽しい。

楽しいと言えば、三月10日の親睦会の会食は皆「食べること飲むこと」そしておしゃべりに、はじめて専念し、満足した。

第1回「学習会」

2007年4月21日（土、夜）18：30～20：30

お約束の受講者の皆様は無事参集し、さらに見学者がお二人もきてくださり、会員の皆様もほどよい人数の方が出席してくださった。

いつもの自己紹介と、これまでの漢点字との関わりはどうであったかを簡単に話していただいた。

受講者には、点字と墨字の「漢点字テキスト」を、羽化の会員とガイドヘルパーの方には墨字のテキストをお配りした。

岡田さんが、漢字と漢点字との成り立ちを大筋で話し、漢点字交じりの文章は、「マス開け」をどうするかなどの面倒は要らないが、少し記号類に慣れていただくこと、助詞の「は」「へ」の使い方、カタカナ記号などを説明した。そして、漢数字の一〇九、〇、十、廿、百、千、万、兆、の16文字を説明した。

「学習会」の記録を取ってくださるよう、羽化の会員にお願いした。快く引き受けてくださり、頼もしい。

「羽化61号」が出来上がり、わたしの手元に届いたので、少しでも早く、と本日まで参加くださった羽化の会員にはお配りした。後は5月の例会のときにお渡し

する。

受講者には、既に岡田さんが、「テープ版羽化」の60号から、聞いていただくよう、「横浜漢点字羽化の会」の係の方に頼んでくださり、「聞かせていただきました」との報告があった。

第18回例会、2007年5月9日（水、昼）

13…30…15…30

まず、「漢点字学習会」のご協力をありがとうございました。滑り出しが良かったと思っっているのはわたしだけではないような気がする。

本日、一人の会員の方が、「漢字」にまつわる小さな本をご紹介くださった。優しい文字にもルビが付いているので、「学習」が少し進んだところで、個人的に、漢点字学習と平行して、「読み物」としてお配りしたらよさそうな気がした。早速有志で入力をしていただくことにし、もう準備もされ、原稿も配布されたようである。

木村は放送大学の「中間リポート」を、指定期日内に提出することができた。これも、会員の方のご協力無くしてはできないことである。

レーザーライターに使う用紙は、カステラを包んでい

る素材と似ているから、それを、ある程度まとめて買えば安くならないか。一度ためてはどうか。その話を機に、漢字を表現する素材のあれこれについて意見が出された。ハッピーインクを使えば、同じものが沢山できる、ティッシュを何枚も重ねて点字版で書いたことがある、など。そして、ハッピーインクのものがどれほど使いやすいか、効果はどうか、素材の価格なども考慮してやってみよう、という会員さんが現れた。

この会のメインテーマの、複雑な文字をどんな言葉を使って表現したら、視覚障害者が、漢字の形を理解できるか、について、岡田さんが工夫された方法を解説した。

この日は予定時間を過ぎてしまったが、皆様からは不平は出なかった。けれども、皆様お忙しい中を来てくださるので、時間超過は気をつけなければいけないと思っっている。皆様済みませんでした。

第2回「学習会」、2007年5月19日（土）

18…30…20…30、第一会議室

お一人が急病で欠席されたが、羽化の会員も、受講者も少し和んできたように思える。質問も出たし、この漢字はどんなときに使うかなど、活発な声も出た。



レーザーライターが登場。会員さんたちが、岡田さんから、指定された文字を書く段になって、それぞれ、ケイタイ電話の辞書機能を使って、確認し、如何に間違えずに書くか、と誠実に対処なさること、また、即座にケイタイが出る若い機転もほほえましく感じた。もちろん、白川静先生の「常用字解」を持参している方もおり、文字の細かい意味や変化なども読み上げてくださる。この硬軟合わせての学習会は楽しい。

たとえば、レーザーライターで、「兆」と「元」を書いていただく。「兆」の文字には、2本、縦にある線が途中から曲がっているでしょう。これを「ひとあし」といいます。まるで一歩踏み出しているようでしょう。この縦の曲がった線が、元の中にも、長さが違う横線2本の下にもあるでしょう、漢点字では、「元」は「兆」の近似文字としています。」

岡田さんのもっと的確に説明しているが、わたしが書くと、かえって混乱させてしまうので、こんなところ、学習内容には触れないことにする。

レーザーライターで書いた文字

廿、革、漢、千、万、一、亜、亞、三、参、九
丸、兆、元、億、意、目、見、目の形、

* 予告

6月の例会(第19回)2007年6月13日(水、昼)
13:30~15:30、7階第二会議室

第3回「視覚障害者のための〈漢点字〉学習会」
(通称〈学習会〉)

6月16日(土、夜)、18:30~20:30

ヒューマンプラザ 7階 第一会議室

7月の例会(第20回)2007年7月11日(水、夜)

18:30~20:30、7階 第一会議室

第4回学習会 7月21日(土、夜)

18:30~20:30、7階 第一会議室

わたくしごと

少学4、5年の、今にも雪が降り出しそうな、どんよりとした日曜日の昼下がりのこと、二人の大人の話を、聞くともなく聞いていた。話し手は、一方的に一人であった。

「今ねえ、こんな寒空が一層身にしみて、心まで冷え冷えとして、おなかの中まで寒くなっちゃった。だけど止められなくて、とうとう最後まで読んでしまっただわ。」

平家物語。平家が敗れて二位の尼に抱かれて、安徳帝が壇ノ浦で入水して、平家の武将たちも、それぞれ帝を追って入水したり、源氏と戦って死んでしまうのは、まあ歴史の一齣として習って来たから、それは事実として読んだのですが、わたしが堪えたのは、残されたその後の女性たちの行く末です。たとえば、平清盛の長男重盛の二番目の息子資盛すげもり、そう、平清盛から見ると孫に当たるのですけど、その資盛の恋人に建礼門院右京大夫という女性がいましてね。この建礼門院右京大夫というのは、建礼門院のところ仕えている、右京大夫という、当時の役職名で、昔は女の人にはよほど身分が高くないと名前は記録に残っていないのです。それで、建礼門院右京大夫という、誰もが、あの人だと分かるようになっていたのです。その右京大夫が仕えた女主人、建礼門院徳子という人は、さっき話した、二位の尼に抱かれて入水した安徳天皇の生母です。しかも、この建礼門院徳子は、平清盛の娘なのです。今をときめく清盛の娘で、天皇の母のお屋敷に仕えていたのですから、右京大夫が美しく、賢い、才女だったの言うまでもありません。この女性すげもりは資盛の正妻ではないのだけれど、誰もが認める恋人でした。この資盛が生きながらえるとは思えませんでした。

したが、恋する人のことですから、一日も長く生きていて欲しい、と願っていました。入水したという知らせを受けると、彼女は泣き暮らしたのです。けれども、彼女はとうとう、ある決心をしました。泣いてばかりいてはなんにもならない、資盛のためにどうしたらよいか。そう、恋人の菩提を弔おう。ただ尼になつてしまうのではなく、何かある。そして、右京大夫は、これまでに資盛からもらった手紙を全部漉き直して、薄様にして、その紙に写経をします。写経というのは、難しいお経を一字一字書き写すことです。あなたたちも、点字で写し書きをするわね、あれと同じです。」

最初は、自分の世界に浸って話していた彼女は、わたしが話しに引き込まれていることに気づいてからは、話しぶりも丁寧になり、「正妻ではないけれど」と言ってから、「本当の奥さんではないけれど、昔、この時代は正式の奥さんの他に、恋人がいるのは普通で、どんなすばらしい人が、恋人になっているかで、その人の評価が決まるのです。今とは考え方が違い、大切にされる恋人ほど、ほとんど奥さんと同じような生活をしていましたし、周りの人たちもそのことを非難などしなかったのです。通い婚といって、正式に結

婚しても今とは違い、男の人が、女の人の家に通うので、恋人が一人や二人いても問題はなかったのです。」とか、紙漉の方法はとくに丁寧に、また出家して尼になるとはどういうことか、写経とはなにか、など、大人には説明の必要がないようなことまで話してくれた。

彼女はこうも言った。「キリスト教の世界とは違いますが、わたしは、やはり田舎の古い家で育ったせいかな、こんな仏教的な表し方も理解できるし、いいなあとも思う。尼にならない生き方、しかも写経までしながら、その後、後鳥羽天皇のそば近く仕えているのです。当時としては現代的な生き方、もしかしたら、世間の古い人たちからは非難されたかもしれないです。」

今考えると、かなり長い時間だったと思うが、全て初めて聞くことばかりで、しかもちつとも飽きることはなかった。それどころか、話が終わってしまった、というより「夕食です」の知らせで中断させられたのだから、残念でならなかった。とはいえ、子供のことで、次の機会をねらって続きをせがむには、なんとなく大人の話を盗み聞きしたような後ろめたさもあり、さらに、大人の世界に立ち入りすぎているかもしれない、というどこもない気恥ずかしさもあって、そ

れ以上踏み越せなかった。

愛しいひとからの文柄を全部水に溶かし、漉き直す。紅梅、薄紅、うす桃色、桜色、萌葱色^{もよぎいろ}、梔色、薄青、朽ち葉色。相手への心の深さに合わせて、紙の質と色を選び、季節に合わせて梅や撫子、萩や紅葉の一枝を添えて、届けられたものが、その人の手（筆）の跡もすべて、彼女の涙とともに薄墨色に漉きあげられたのではないだろうか。

この嘆美な世界を教えてください。彼女には、もう何十年と会っていないし、何処にいるのかも分らない。あの「語り」は教えでも導きでも、まして押しつけてはなかった。素直な彼女の情熱の発露であった。だからこそ今わたしは、日本の古典の世界に魅せられているのだと思う。本の中でしか味わえないこの世界をさまよい歩きながら、楽しんだり、嘆いたり、人と人との複雑さに驚かされながら、彼女の痕跡の大きさと、不可思議さを思い、何より彼女に逢って感謝の思いを伝えたいと願っている。多分、わたしがあの数時間を心の種に育てているとは気づいていないと思う。それだけに、何とか訪ね当てる、彼女の情熱には及ばないけれど語り合いたい、いいえ、もっと深めている彼女の話の聞かせていただきたい。

2007年6月3日

漢文のペーシ

項羽と劉邦は、いづれも無名の頃、秦の始皇帝の行列を見る機会があつた。そのときの両者の言葉が『史記』に記されている。

彼取りて代はる可きなり

卷七・項羽本紀

秦始皇帝游會稽、

渡浙江。梁與籍俱觀。

籍曰、「彼可取而代也。」

梁掩其口曰、「母妄言、

族矣。」梁以此奇籍。

大丈夫當に此くの如くなるべきなり

卷八・漢高祖本紀

高祖常繇咸陽、縱觀、

觀秦皇帝喟然太息

曰、「嗟乎、大丈夫當如

此也。」

秦の始皇帝會稽に遊び、浙江を渡る。梁籍と俱に觀る。籍曰わく、「彼取りて代わる可きなり」と。梁其の口を掩いて曰わく、「妄言する母かれ、族せられん」と。梁此れを以つて籍を奇とす。

游會稽 二二〇年、始皇帝は會稽山に登り、禹(伝説上の夏の聖王)を祭り、碑を建てた。

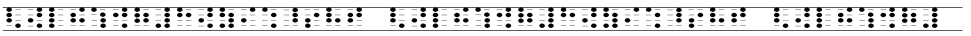
梁 二 項籍(項羽)のおじ。母 二 「なカレ」と読んで禁止の語法として用いられることが多い。族 二 一族皆殺しになる。矣 二 文末に付けて断定や推定の語気をあらわす。訓読しない場合が多いが、文脈により「：せん」「：ならん」などと読む。奇 二 ただものでない。

高祖常て咸陽に繇を縱にして、秦の皇帝を觀る。喟然として太息して曰わく、「嗟乎、大丈夫當に此くの如くなるべきなり」と。

繇(よう) 二 夫役。土木事業などに徴用されて働くこと。縱觀 二 縦は、ほしいまま。自由勝手に見てまわる。喟然(きぜん) 二 ため息をつくさま。大丈夫(だいじょうふ) 二 立派な男子。

當 二 再読文字で、「(まさ)ニ：(べ)シ」と読む。

【参照図書】新開高明『語法詳解 史記』(旺文社)



秦ノ始皇帝遊ビ會稽

ニ、渡ル浙江ヲ。梁與

籍俱ニ觀ル。籍曰ハク、「彼

可キ取リテ而①代ハル也」ト。

梁掩ヒテ其ノ口ヲ曰ハク、

「母カレ妄言スル、族セラレン

矣」ト。梁以ツテ此レヲ奇トス

籍ヲ。

高祖常テ繇シ咸陽ニ、

縦ニシテ觀ヲ、觀ル秦ノ

皇帝ヲ。喟然トシテ太息シテ曰

ハク、「嗟乎、大丈夫キ當ニ

如クナル此クノ也」ト。

～ 肉月ノ缶十系よう

※ 繇(繇よう)は、JIS第1・第2水準にない漢字です。段落の後にその点字符号と、墨字の形の説明(字式)、よみを入れます。



秦の始皇帝

漢点字講習用テキスト

初級編 第三回（全十回）

本稿は点字符号の引用が多いため、見やすさを考慮して横書きで表示しています。

2 基本文字（2）

2. 第一基本文字（2）

〈第一基本文字（一マス漢点字）〉の続きを勉強しましょう。

（13） 金[⦿] キン コン かね

黄金の意、まばゆく光っている形です。カネと訓読する場合は、おかねを意味します。また、最も大切なものの意にも用いられます。部首としては、金属の名前や、金属に関係する文字を表します。

「[⦿]色」「[⦿]黄[⦿]」「[⦿]星」「[⦿]科玉条」「[⦿]は天下の回りもの」

（14） 木[⦿] モク ボク き こ

植物の木を象った文字です。部首として、木の名前、木を素材としたものを表します。

「[⦿]樹[⦿]」「[⦿]材」「[⦿]星」「[⦿]肋[⦿]」「[⦿]並[⦿]道」「[⦿]場」「[⦿]添え[⦿]」「[⦿]挽き」

（15） 草[⦿] ソウ くさ

草の根と茎と葉を表した文字です。墨字では草冠の下に早の形ですが、漢点字では「[⦿]⦿」の形で〈草冠〉に用いられます。意味は、草、花、草を素材とした作物などを表します。

「[⦿]原」「[⦿]根[⦿]皮」「[⦿]書体」「[⦿]民[⦿]」

（16） 犬[⦿] ケン いぬ

犬の姿を象った文字です。部首では、〈獸偏〉として、主に肉食動物を表します。漢点字でも同様に、〈獸偏〉に用います。

「[⦿]忠[⦿]」「[⦿]盲導[⦿]」「[⦿]も歩けば棒に当たる」

（17） 子[⦿] シ ス こ ね

身体の割に頭の大きな赤ちゃんを象った字です。音はシとともにスト

読むことも多くあります。十二支のネズミの意味もあります。部首として沢山の文字に含まれます。

「孫」 「利」 「椅」 「扇」 「供」 「親」 「孫」

(18) 都 ト ツ みやこ

国の中心の都市です。この文字に含まれる部首は〈おおざと〉ですが、漢点字では、「こざと」、「おおざと」と、二つの働きをします。

「京」 「東京」 「合」 「の西北」

(19) 市 シ いち

ものを売り買いするために人の寄り集まる所です。各地にあるバザールや金融商品を取引するマーケットも含まれます。現在では行政区画の〈市〉の意味が強くなっています。

「場」 「場」 「横浜」 「場」 「蚤の」

(20) 発 ハツ はな - つ た - つ

ものごとを始めるという意味です。漢点字では、「はつがしら」に用います。

「出」 「送」 「育」 「車」

(21) 食 ショク た - べる く - う

食物を口に入れてたべることです。部首では、〈食偏〉として用いられます。

「事」 「外」 「動物」 「べ物」 「い」

(22) 馬 バ メ マ うま

動物のウマです。たてがみを靡かせて走る姿を象った文字です。部首では、〈馬偏〉として、交通や騎馬・軍事に関わる文字を作ります。

「荷車」 「競」 「駿」 「絵」 「方」 「縞」

(23) 田 デン た

綺麗に区画されたたんぼです。古く中国では、はたけの意味にも使われました。部首として多くの文字に含まれます。〈田づくり〉では、農業に関わる意味を表しますが、必ずしも〈田〉の意味を表すとは限りません。

「水」 「地」 「畑」 「稲」

(24) 竹 𦵑 チク たけ

植物のタケです。タケの枝が茂っている形を表しています。部首では、〈竹冠〉として、タケの名前や、とりわけタケを素材とした作物、多くは農具の名前に含まれます。

「𦵑𦵑の友」「𦵑林」「𦵑の𦵑」「𦵑𦵑」

(25) 土 𡗗 ド ト つち

土を盛った形を象った文字です。もとは神を祀ったヤシロの意でしたが、後に、生産の大本であるツチ、土地の意味になりました。それから、領土、国土の意味にも使われます。部首としても多くの文字に含まれます。

「𡗗地」「𡗗国」「𡗗星」「𡗗器」「𡗗焦」「𡗗塊」「𡗗𡗗工事」「𡗗いじり」

(26) 手 𠬞 シュ て た

人の手を象った文字です。手で何かをするという意味で、「…をする人」という意味にも使われます。部首では主に〈手偏〉として、動作をしたり、働きかけたりの意味を表します。

「選𠬞」「運𠬞𠬞」「𠬞断」「𠬞術」「𠬞紙」「相𠬞𠬞」「𠬞向ける」「𠬞折る」

(27) 戸 𡩇 コ と へ

家の戸口を象った文字です。家、戸口、扉、家の数の単位を表します。部首では、〈戸冠〉あるいは〈戸垂〉となります。

「𡩇籍」「𡩇別訪問」「𡩇𡩇𡩇建て」「𡩇口」「𡩇井𡩇𡩇」「𡩇𡩇𡩇𡩇𡩇𡩇𡩇𡩇」

(28) 人 𠬞 ジン ニン ひと

ヒトの姿を象った文字です。部首では、多く〈人偏〉として、ヒトに関わること全般の意味を表します。

「𠬞類」「𠬞間」「日𠬞𠬞𠬞𠬞」「𠬞氣」「𠬞𠬞𠬞𠬞」「𠬞出」

(29) 仁 𠬞 ジン ニ ひと

墨字では人偏に漢数字の二の形で、人が互いに認め合い、助け合っていることを表した文字です。漢点字では、二つ目の〈人偏〉として用いられます。

「𠬞王」「𠬞徳」「𠬞術」「𠬞義礼智信」「巧𠬞𠬞令色鮮矣𠬞」

(30) 水 𠬞 スイ みず

ミズの流れる形を象った文字です。部首では〈さんずい〉として、ミ

ズに関わる意味を表します。

「𠄎流」「𠄎泳」「𠄎星」「𠄎道」「𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎鉢」

(31) 氷𠄎 ヒョウ ヒ こおり こお-る

水が冷えて固まったもの、「こおり」を象った文字です。墨字の部首では〈にすい〉として用いられますが、漢点字では、二つ目の〈さんずい〉として、また〈にすい〉として用いられます。

「𠄎結」「𠄎点」「𠄎河」「𠄎山」「𠄎柱」「𠄎𠄎」

(32) 力𠄎 リキ リョク ちから

腕にチカラを入れた形を象った文字です。一所懸命やる、力を込めて努力するという意味があります。

「入𠄎」「動𠄎」「𠄎𠄎𠄎電」「𠄎点」「𠄎𠄎」

(33) 示𠄎 ジ シ しめ-す

神様へ捧げ物をする祭壇を象った文字です。部首では〈示偏〉として、神事や祭祀に関わる意味を表します。

「指𠄎」「提𠄎」「教𠄎」「掲𠄎板」

(34) 私𠄎 シ わたくし

ワタクシー人の、個人の、身勝手な、という意味を含んだ文字です。「公」の対語の意味合いを強く含んでいます。漢点字では「𠄎𠄎」の形で、〈ノ木偏〉として用いられます。

「𠄎事」「𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎」「𠄎案」「公𠄎の別」「𠄎事」

(35) 走𠄎 ソウ はし-る

足を早く運んで走る姿を象った文字です。部首では〈そうによウ〉として用いられます。

「奔𠄎」「逃𠄎」「競𠄎」「滑𠄎」「小𠄎り」

(36) 進𠄎 シン すす-む

墨字では、「しんによウ」に「隹(ふるとり)」の形で、先へすすむという意味を表しています。部首の〈しんによウ〉は、「すすむ」という動きを表しています。漢点字でも、「𠄎𠄎」の形で、〈しんによウ〉として用いられます。

「𠄎歩」「𠄎化論」「出𠄎𠄎𠄎行」「行𠄎𠄎𠄎𠄎」「前へ𠄎め」

(37) 火 𤇀 カ ひ

火がめらめらと燃えている様子を象った文字です。部首では〈火偏〉として、火や熱や煮炊きに関わる意味を表します。また、文字の下ところに四つの点を配置した〈烈火〉として、火である形、火を点ける形を表します。漢点字でも「𤇀𤇀」で〈火偏〉を、「𤇀𤇀」で〈烈火〉を表します。

「𤇀星」「𤇀災」「消𤇀」「点𤇀」「着𤇀」「𤇀𤇀𤇀電」「𤇀の𤇀𤇀」
「𤇀の用心」

(38) 女 𤇁 ジョ ニョウ おんな め

女性の柔らかな姿を象った文字です。部首では、多く〈女偏〉として女性、やさしさ、柔らかさなどの意味を表します。

「𤇁性」「𤇁𤇁大𤇁」「男𤇁」「𤇁𤇁𤇁」「𤇁房」「𤇁の𤇁」

(39) 玉 𤇂 ギョク たま

きれいに磨いた堅い大理石を象った文字とされています。また、価値の高いもの、「ギョク」と読んで接頭語として、相手への尊敬語としたりします。「タマ」と読んで、「まるいもの」「まるく光る宝物」の意味にも用いられます。

「𤇂座」「宝𤇂」「珠𤇂」「𤇂𤇂𤇂」「𤇂に瑕」

(40) 方 𤇃 ホウ かた

左右に真っ直ぐ伸びる形を象った文字です。「ホウ」と読んで、方向、方法、四角い形の意味を表し、「カタ」と読んで、相手や第三者を婉曲に呼ぶなどの意味に用いられます。

「𤇃法」「𤇃向」「𤇃角」「𤇃𤇃𤇃」「𤇃𤇃𤇃」「𤇃位」「漢𤇃」「処𤇃箋」
「…様𤇃」

(41) 石 𤇄 セキ シャク コク いし

大きな石を象った文字です。部首としては、硬いもの、壊れないもの、不毛なものの意味を表します。「コク」と読んだ場合は、重さや容積の単位に用いられます。

「𤇄材」「岩𤇄」「𤇄仏」「𤇄𤇄𤇄流」「磁𤇄」「祿高𤇄𤇄𤇄𤇄」「𤇄蹴り」

.....

近似文字

(1) 未^{三三} ミ いま - だ ひつじ

「木^{三三}」の〈近似文字〉です。漢文訓読で、「いまだ…ず」と読まれる文字です。また、十二支のヒツジの意味もあります。墨字では「木」の横棒の上に、短い横棒を加えた形です。

「^{三三}熟」「^{三三}成年」「^{三三}完成」

(2) 未^{三三} マツ すえ

「木^{三三}」の〈近似文字〉です。ものの終わりの方の意味があります。墨字では「木」の横棒の下に短い横棒を加えた形です。

「月^{三三}」「^{三三}期^{三三}」「^{三三}摘花」

(3) 本^{三三} ホン もと

「木^{三三}」の〈近似文字〉です。「木」の根本に小さな横棒を交差させた形です。木の根の意味で、ものごとの根本、本質を表しています。また、書物の意味でも用いられます。

「^{三三}質」「根^{三三}」「日^{三三}」「日の^{三三}」「^{三三}屋」

(4) 由^{三三} ユ ユウ ユイ よし

「田^{三三}」の〈近似文字〉です。くびの細いつボの形を表しています。

「自^{三三}」「理^{三三}」「^{三三}縁」「^{三三}緒」「…との^{三三}」

(5) 曲^{三三} キョク ま - がる ま - げる

「田^{三三}」の〈近似文字〉です。「由」の縦棒が二本になった形です。まがる・まげるの意味から、音楽の曲想の意味になります。

「湾^{三三}」「^{三三}線」「樂^{三三}」「^{三三}阿世」「^{三三}げ物」

「へそ^{三三}がり」

(6) 永^{三三} エイ ヨウ なが - い

「氷」の近似文字です。水が曲がりくねって細く長々と流れる様子を象った文字です。時間的にながいことを表します。

「^{三三}久」「^{三三}続」「^{三三}遠」

.....

「報告と」案内

一 賛助会費ご納入への御礼

以下は、昨年度に賛助会費をご納入いただきました皆様のご芳名です。本会の活動へのご支援と、深く御礼申し上げます。（順不同）

村田忠禧様（横浜国大教授） 大滝正雄様（横浜市議会議員） 関口常正様 田崎吾郎様 梶浦千郁様
佐川隆正様 松村敏弘様 飯田みさ様

二 横浜市中央図書館への納入書

今年度の横浜市中央図書館への納入書として、『論語』（岩波文庫）を完成し、既に五月末に納めました。体裁は、本文にご紹介したものに、「白文」と「注記」が加わります。漢点字書は、六分冊です。

漢点字使用者の皆様には、是非ご精読いただきたいと願っております。

三 『神さまがくれた漢字たち』

東京漢点字羽化の会では、漢点字を学んでいる方々向けに、一冊の本の漢点字訳に着手しました。中高生向け、総ルビですので、大人にも読み易く、分かり易い本です。

書名…神さまがくれた漢字たち

著者…山本史也

監修者…白川静

編者…特定非営利活動法人・文字文化

研究所

発行所…株式会社・理論社、二〇〇四年

十一月一九日・初版第一刷発行、二〇

〇五年四月二十日・初版第四刷発行

白川静先生の漢字理解が、易しく説かれています。ご期待下さい。

編集後記

▼東京でも「視覚障害者のための〈漢点字〉学習会」が始まりました。視覚障害者の方に漢点字を習っていたくには、墨字の漢字そのものの形を理解していただくことも必要です。そのために、お手伝いの方にレーズライターで大きな漢字を書いてもらって指でたどり、漢字の形を理解してもらいます。▼しかし、これは実際の漢字の形を知って、漢点字の構造を理解し、覚えるための補助手段となるもので、視覚障害者が直接、漢字を書いたり読んだりするのは漢点字によるしか方法がないということをもっと多くの方に認めていただきたいと思います。（木下）

E-MAIL (岡田健嗣) : eib_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》

今回の発行は8月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。